
閉会挨拶

【竹内整一】 それでは、会を閉めるにあたりまして、閉会のご挨拶をいただきます。まず、日本側を代表して、東京大学の末木文美士先生からお願いいたします。

【末木文美士】 大変議論が白熱してまいりまして、お互いの理解も深められてきたところであります。またまだこれから、本格的な議論を深めたいところではありますが、残念ながら時間となつてしまいました。ここであらためて、日本側の代表団を受け入れるために準備段階から当日のお世話までいろいろな面でご配慮くださった下崇道先生をはじめとする中国側のみなさまに深く感謝いたします。また、翻訳や当日の通訳を担当してくださった方々にも御礼申し上げたいと思います。

今回の会議は「東アジアの死生学へ」というテーマで議論してまいりまして、ここに韓国という東アジアの大事な構成要素が入っていないことは残念ではありますが、しかし日中間だけでもさまざまな問題が浮き

彫りにされたかと思えます。とりわけ、日本語では「死生学」であり中国語では「生死学」というのは生と死への重点の置き方が違うのではないか、という問題提起が昨日もありましたが、討論のなかでもやはり日本側が死の問題を重視するのに対して、中国側は死から生を見直すような、生に重点を置くといった見方の違いがあったのではないかと思えます。

それは、それぞれの文化が長い間育ててきた伝統の違いもあると同時に、それぞれの文化が現在置かれている状況の違いにも関係するのであろうと思えます。中国が今後なお大きな発展を志しているのに対して、日本の文化・社会はむしろ発展を遂げた段階で限界に到達しているという状況も一つには反映されているのであろうと思えます。

そのようななかで日本側としましては、ただ、死だけを考えていくわけにはいかない。むしろ、これから発展していこうとする中国のエネルギーに学ばねばならないところがあると思えます。また、中国側も単なる発展だけではない、発展の行き着く先がどうなるか、ということも見つけてもらいたい。このような相互の課題が残されたのではないかと思えます。

今回の会議場となったこの趙家楼飯店は、かつて五四運動の出発点となった、いわば抗日運動の出発点となった歴史的な会場であるということですが、その場所が今日、日本と中国の新たな相互理解の出発点になったのであれば、すばらしいことであろうと思えます。

今回、日本側から大勢の若い研究者の方々が参加されましたが、残念ながらごく一部の方を除いて、十分に意見を発表する機会がありませんでした。しかし、今後、若い人たちによって、また新しい研究が担われていくものと思えます。また、中国側からも大勢の若い研究者の方々が参加してくださいました。このような新たな世代の研究者によって、これからの研究がより大きく発展することを願って閉会の言葉といたします。あり

がとうございました。

【竹内】 続きまして中国側、鄭曉江先生に閉会のご挨拶をお願いします。

【鄭曉江】 二日間の会議はこれで一区切りがつかしました。人間の生命への自覚は、まずは生と死の自覚だと私は思っております。生と死の問題は人間に常につきまとう問題であり、そして直面しなければならぬ問題であるとも思っています。近代以降、物質主義、享楽主義が前面に押し出され、生死の問題の多くは隠蔽されてしまいました。二十一世紀になって生命への意識は蘇り、古代ギリシアにおいて起こった死亡哲学と、二十世紀のはじめに科学の一分野として登場した死亡学、六十年代に起こった死亡教育、そして九〇年代に確立された死生学のさまざまな問題をも議論した今回の会議によって、これからの共同研究の進むべき方向が見えてきたように思います。その意味で、今回の会議は、今までの研究成果を受け継ぎ、また、今後の研究の展開に道を開く会議であり、その歴史的意義も大変大きいものと思います。

二日間の会議は短いものですが、東アジアにおける死生学の研究は、今後も考え続けなければならない課題です。遠くない将来、中日両国の学者が再度死生学に関する議論を深める場がふたたび設けられることを期待しております。みなさまのお帰りの道中のご無事と、これからのご活躍を祈念いたしまして私のご挨拶とさせていただきます。

【王守華】 それではこれで閉会させていただきます。